

眠り姫の憂鬱とかつて子供だった護り人たち／金糸銀糸の蜘蛛の糸／

収録レポート

●どうしても我武テツさんがいい

『眠り姫の憂鬱』シリーズは、基本的に人々の意見を参考にしてキャストさんに打診をしている。

既存作品の演技を拝聴し、「この方なら」というキャストさんを探るので、結果的にヴィスクもハーランもパストルもシチュボ界にこの人ありという方をお呼びする形になつた。しかし今回、グロウの声だけがどうしても決められなかつた。

実のところ、第一作目を配信してから一年間、ずーっと「グロウの声は誰がいいだろう」と思い続けてきた。

低くて、豊かで、包容力があつて、硬質で、ノーブルで……そんな声の人はシチュボ界にいのないのでは……？ と諦めかけていたところに、我武テツさんがいたのである。

とはいって、頻繁にシチュボに出演されている感じではなく、打診してみても「もうR18作品には出でいません」と言われる可能性もある。

しかし恐る恐る打診してみたところ、ご快諾いただき、今回我武テツさんをグロウのCVとして無事お迎えできたのである。
やつたー！

●バランスを取りたい

ところでグロウは『眠り姫』シリーズの中で唯一「真正」のサディストだ。

ほかのシリーズの男たちは、別にヒロインを苦しめたいわけではない。結果的にヒロインは嫌がるけど、彼らが与えたがつてているのは愛と快樂だ。

しかしグロウはサディストなので、合意のうえで叩いたり首絞めたりしてくる。

この作品は『眠り姫の憂鬱』シリーズのなかで、唯一「凌辱作品」ではなくて、合意のうえでプレイを楽しむ「溺愛SM作品」なのだ。

つまり「徹底的に人権を奪われたい人」にとつてはぬるく、「いやラブしたい人」にとつてはキツい。

そういう塩梅になっている。

なんというニッチ。よし、溺愛分岐エンドもつくろう。

そういうわけで、「再度、ヴィスクを演じてはいただけませんか」と茶介さんにも出演の打診をすることとなつた。

そしてご快諾いただけた。

やつたー！！

ヴィスクに出演してもらえるなら、冒頭でグロウとのケンカもやりたい……話の流れがわかりやすくなるように、第一作目のトラック4も再録したい……。

そういうわけで、今回のような構成になつた。

再録分を考えなくとも、今まで一番長い脚本になつてている。

現場で刷り出し原稿の厚さを見てやや引いた。

これを……この厚さの原稿を……読んでいただくのか……！

そして収録がはじまるのである。

●入念なマイクテスト

「あまり慣れていないので、問題があつたらすぐ止めてください」

グロウ役にお迎えした我武さんに、めちゃくちや低姿勢でそんな挨拶をいただいた」とを不思議とよく覚えている。

ダミへの収録が久々ということで、ヘッドホンで音を聞きつつ、マイクがどんな感じで音を拾うかを少し確認していただいた。

そのままの流れで、グロウのキャラ感のチェックをすべく、トラック1を読んでいただく。なんとなくキャラクターの説明をした気がするけれど、サークル主は声優さんを前にすると緊張で記憶が吹き飛ぶのでほとんど何も覚えていない。

もちもちしていたころのグロウのキャライラストなどを見ていただき、十九歳時点のグロウからテストを開始する。

テスト前に我武さんが何度かセリフを読んでみて「んー、むずかしい……」「十九歳の声じゃないなあ……」と首をかしげていたのが現場の笑いを誘っていた。

とはいえた際に演じていただくと、ちゃんと十九歳のグロウに聞こえる。

サークル主的に、大人グロウの声のイメージはあつたけど、十九歳グロウの声のイメージはまったくつかめていなかつたのだけど、我武さんの声を拝聴し「この声な気がする」というのがようやくつかめてきた。

いやしかし「慣れてない」とはどういうことか。

マイクに対する距離感も完璧だしなんの文句もない。これで慣れてないなら、慣れてしまつたら一体どうなつてしまふのか。

そして収録は大人グロウへと進んでいくのである。

●圧倒的重量感

さて大人グロウである。

こちらも最初にテストでキャラ感を調整させていただくのだけれど、ずっと「低く」「冷酷に」「脅すように」とお願いしまくるヤバいサークル主と化していた。

サディズムとは何かを語り、マゾヒズムとは何かを語り、周りからややドン引きの視線が飛んできていたような気がするけどそんなことはなかつた氣もする。

我武さんの声は、低音でも優しくて包容力がある。

なので「優しくしやべらないでください」とシチュボにあるまじきお願いをし、我武さんの中にあるありつけのサディズムを込めていただいた。

重量感のある我武さんの声で、低く脅しつけるように命令セリフをしゃべっていただくと、これが実に最高なのである！

音響監督さんにも「優しくなくていいんですか……?」「もつとテンション上げなくて大丈夫ですか……?」と都度都度確認していただきつつ、毎度「優しさなくていいです」「ずっと冷静で大丈夫です、Sはプレイ中に喜ばんのです」と、終始ヤバいサークル主であり続けた。

エンジニアさんから「ここはもつとねぶるようになつた方がいいのでは?」と提案いただき、「こやつ分かっているな……サディズムが……!」などと思いつつ、そちらの方向に調整していただいたりもした。

これはやた先生＆こも先生の収録漫画にも描かれているけれど、私があまりにもサディズムを要求するせいで我武さんがサディズムを呼び起こすタイムが発生したりもした。

音響監督さんが30秒程度で「では始めましょう」と声をかけると「待つてつて言つてるじやん！」とひと笑いを誘つたりもした。

我武さんは収録中もずっとおちやめなムードメーカーで、収録している内容のヤバさに反して雰囲気は和やかだった。

こんな和やかな空気のなかで、我武さんに首絞めセックスの収録をしていただいたのである！

●首絞めセックスは難しい

首絞めセックスには「死なないためのお作法」というものがある。

十秒以上は絶対に絞めないというお作法だ。

そして「絞める間にガン突きする」というプレイもある。

なので、10カウントしながらガン突きの呼吸をしていただく必要がある。

セリフでは十秒数えているのに、呼吸は激しく……さながら右手と左手で動きの違うピアノのような台詞の読み方が求められる。

誰が想像できるだろうか。

「これは……1、タンタン、2、タンタン」という感じの息遣いになるんですかね……？」
というような台詞から、「ダンスのテンポの話」ではなく「首絞めセックスの息遣いの話」だと、いつたい誰が。

しかも、首を絞めるターンと緩めるターンを交互にるので、本当に複雑な息遣いが求められる。

後半なんて、テンカウントのセリフがなく「頭の中でテンカウントしてください」という注釈を台本に入れてある。

頭の中でカウントしながら、吐息の演技をし、セリフを読み、フィニッシュする……。とんでもない脚本をお願いしてしまったものである。

しかし我武さんは見事にやつてのけてくださったのだ！

予定より一時間押すハードな収録ではあつたけれど、この素晴らしい低音サディスト演技が皆様のお耳に届くのをとても楽しんでいた。

●溺愛ヴィスク

グロウパートの収録が終わったら、ヴィスクパートの収録である。

何せ前回茶介さんにヴィスクを演じていただいたのが一年前なので、以前収録したヴィスクの声を流して声色を思い出していたが。

そして十八歳ヴィスクのパート。

ほぼノーリテイクでするつと終わる。

図書室のシーン。

ほぼノーリテイクでするつと終わる。

何か所か修正していただいた気がするけれど、めちゃくちや細かい修正点だったので全く記憶に残っていない。

そしてR18トラック。

溺愛……圧倒的溺愛……！

シリーズ1作目で「次は本気で当てますよ?」とか言いながらムチ振つてた男とは思えないまつとうさ……穏やかさ……！

本当にこの現場でさつきまで首絞めセックスを録つてたのか?

歪んだ愛憎サークルを自称するbone cageではあるけれど、いつか全編ほのぼのないちやラブ溺愛作品を作つてもいいかなと頃ひてしまふほど心が洗われてしまった。

しかし氣のせいだろうか……」のトラックがめちゃくちや長く感じた。

そのめちゃくちや長いトラックも、ほとんどノーリテイクで終わつた。

言うことがなさ過ぎて右から左に流れしていく。

ちょこちょこサークル主の想定と違う部分があつたとしても「それはそれでヨシ！」と思わせてくる説得力がそこにあるので「リティックかけるほどじやないな……」となつてしまふ。そして、制作サイドがそんな風にして流したシーンを茶介さんの方から「このシーンちょつと違くありませんでした？」と確認が入る。

コントロールベースでずっと首をひねりながら「上手いんだよなあ……」「どうなつてんだこれ」「天才……あまりに天才……」と眩き続ける機械と化すサークル主。

先述の通り、グロウパートで1時間収録が押していたにも関わらず、ヴィスクパートが爆速で進んだ結果、押した一時間分を巻き返してしまつた。

後々茶介さんに「押してたからノーリテイクなのかなーと思いました」と言われたけれど、ただただ茶介さんが上手いだけなのである。

●あらすじを忘れた

茶介さんからボイコメをいただき、最後にあらすじを読んでいただいている段階で、ふと我々は気が付いた。

我武さんにあらすじ読んでもらうの……忘れてた……。

今作のメインヒーローなのに……！

しかしあま、あらすじ原稿の内容的には、ヴィスク役の茶介さんのみに読んでいただく形でもさほど違和感はない。

同人サークルならでは細々とした失敗を重ねつつ、今後も色々な作品をリリースしてゆきたいと思つてゐる。

第一作目のヴィスク編から始まつたこのシリーズ。

四作目では1作目の途中から分岐し、ユーザーの選択によつて「溺愛ヴィスク」に帰つてこられる仕様になつてゐる。

もし可能なら、護り人全員の「溺愛眠り姫」とか作つてみたいなど、思うだけは思つてゐるサークル主なのであつた。